
けいおん！ Red Scorpion & Girls Band

ドラゴンインストール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ Red Scorpion & Girl
s Band

【Nコード】

N4267Q

【作者名】

ドラゴンインストール

【あらすじ】

とある事情で共学となった桜ヶ丘高校に入学することになった主人公如月竜也。成り行きで軽音部に入ることとなった彼に待ち受けるものとは？ヒロインはまだ未定です。だってみんな大好きなんだから。それではけいおん！ Red Scorpion & Girls Band 始めます。文才のない自分ですが、精一杯頑張りますので応援よろしく願いいたしますm(____)m

2月1日、設定を若干修正しました。

はじめに（前書き）

頑張って連載していきます

はじめに

お久しぶりです。ドラゴンインストールです。今回投稿する作品は
けいおん！です。長い間投稿できなくて本当に申し訳ありません。
更新は不定期になりますが週一のペースで頑張ります。主人公如月
竜也と原作キャラとの恋と友情と音楽をお楽しみいただければ幸いです。
ヒロインはまだ未定です。だってみんな大好きなんだから。
所々声優ネタがチラホラ出ますが、暖かい眼差しで見守って下さい。
それではけいおん！ さそり座の男と軽音部を何卒ヨロシクお願い
いたしますm(_____)m L e t ' s R o c k ! ! ! !

はじめに（後書き）

プログラムのあとキャラ設定を出します。

プロローグ（前書き）

それでは始めます

ブローグ

??? Side

ピッ！…ピッ！…ピッ！…ピッ！…ピッ！…ピッ！…ピッ！…
！…ピッ！…ピッ！…ピッ！…ガチャッ！…！

朝早くからけたたましく目覚ましのアラームが鳴り響く。

???「うるせえな」

俺は、ベッドの棚に置いている目覚ましを止めると時計を見ることにした。AM06:00。

???「はあ、取りあえず起きるか。」

俺は軽く溜め息をつく、身支度をすることにした。

部屋から出てリビングにあるテーブルに一枚の紙があるのに気がついた。

???「今朝は妙に静か過ぎるかと思ったら、親父の奴居ねえのかよ。」

この家には俺と親父しかない。お袋は、俺を産んで1年するかもしれないかの内に亡くなった。それでこの家には俺と親父の二人暮らした。

親父は仕事の関係で度々家を空けるが、朝からいないのは今回はじめてだ。

俺は親父の置き手紙を見ると一瞬その置き手紙を落としかけた。

『突然だが、しばらくの間家を空ける。食事は自分でやってくれ。入学おめでとう。』

P・S・ 高校生にもなったんだから、彼女ぐらい作れよ竜也（ハ
O^）b?』

手紙の内容に驚きよりも呆れる感情が勝った。

???「本当に突然だな、おい。つか、最後のやつは余計なお世話だ!!。何だよ一番最後の?って!?!。40過ぎのおっさんが使うな!!」俺は置き手紙をごみ箱に叩き込むと、キッチンに向かい手早く調理をすませる。こつ見えても、ガキの頃から色々と教えて貰った御蔭もあり、自炊ぐらい簡単に出来るようになっていた。

手早く朝食を済ませると俺はこれから三年間世話になる学校に向ける家を出た。左腕につけている腕時計を見た。AM07:30。登校するのにはかなり余裕があるが、これには深い理由がある。

これから三年間世話になる高校、桜ヶ丘高等学校なんだが、去年まで女子校だったらしく、少子化の影響もあり今年から共学になったらしい。何故、去年まで女子校だった学校に通わなければならないかというと、此処しか通える学校がなかったからだ。本当だったら中学の時から吊るんでいたアイツ等と此処とは別の高校に通うはずだったんだが、今更どうにかなるものでもないか。

気持ちを入れ替え俺は三年間世話になる学校の門をくぐった。

そこで俺は新しい仲間に出会えるとは、解らなかった

プロローグ（後書き）

次はキャラ設定です

設定！！（前書き）

本作品の主人公の如月竜也の設定です

設定！！

名前 如月 竜也

(キサラギタツヤ)

年齢 15歳

誕生日 11月11日

趣味 音楽鑑賞

ギター演奏

好きな食べ物 ピザ

嫌いな食べ物 甘い物

家族構成

父親 如月 龍馬

(キサラギリヨウマ)

母親 如月 愛佳(故人)

(キサラギマナカ)

・使用するギターは、レスポールスタンダード。
(色は深紅)

・イメージＣＶ

三木眞一郎

・フルメタル・パニック

(クルツ・ウェーバー役)

・ガンダム００

（ロックオン・ストラトス役）

・容姿は英雄伝説〱零の軌跡〱に登場するランディ・オルランドを若干幼くした感じ。

・性格は、外見から軽い性格に見られがちではあるが、面倒見の良さや何気ない優しさを持っている。父親の教育で礼節は弁えている。ただし、上から目線で物を言う奴と、仲間を侮辱する者は別である。クールに見える隠れた熱血漢。

・一人称は「俺」

・ギターは中学時代にバンドを組んでいたためギター歴4年。本人はあまり自覚はないが、かなりの腕前である。

・中学時代は、オリジナルの曲ではなく、多少アレンジした既存した曲を弾いていた。

・バンドを組んでいたメンバーと違う高校を受験した理由は1年前のある事件がきっかけである。

設定！！（後書き）

次回から本格的にいきます

入学！（前書き）

始めまして、ドラゴンインストールです。文才の『ぶ』の字もない私ですが、精一杯頑張ります。それではどうぞ！！

入学！

第一話『入学』

俺は校門をくぐると何処からか視線を感じた。

竜也「（当然と言えば当然だな。去年まで此処は女子校だったからな。）」

視線の大半は好奇心の溢れた視線であって、こういった経験は中学の時に何回もあったな。

俺はたいして気にすることもなく案内板の所まで行くと、新入生のクラス別が書かれた紙を見た。

竜也「（一組には……無しか、二組には……無しか、三組には……あった。）」

どうやら俺は三組らしい。

男子は、俺を合わせて5人いた。

クラスは四組まであるらしく、三組には俺一人だが、一組に二人、二組には一人、四組に二人らしい。どんな奴等かは知らねえが上手くやっていければ幸いだ。

俺は自分のクラスに着くと、これから一年世話になる席に座った。場所は一番後ろの窓際だ。

多分俺の身長が178cmあって一番後ろの席もあるのだろうが、クラスで唯一の男子だからなのだろうな。

クラスに入った時には既に何人が生徒がいた。

まあ俺を除いて全員女子だから男子がいる事態こうなるのはわかっていていた。

しばらくすると、チラホラとクラスメイトとなる生徒が入ってきた。

自然と視線は俺に向けられるが、俺は左手に顎を載せ外の景色を眺めていた。

竜也「（女子ばっかでやりずれえな。野郎に囲まれるより遥かにマシだが、こいつは逆にキツイな）」

俺はそう思いながら、外の景色である桜並木を眺めることにした。

10分ぐらいたったのか、担任となる先生が入ってきた。

先生「これから入学式が始まります。廊下に並んで講堂へ向かって下さい」

どうやら担任の先生は女性らしい。まあ、筋肉モリモリのおっさんより全然OKだ。

俺はクラスメイトに着いていくように講堂へ向かった。

講堂に入って気付いた事があった。

竜也「（右を見ても女子、左を見ても女子。こうなるのはわかっていたが、ホントに女子ばっかだな。）」

校長先生の祝辞を適当に聞き流していき、しばらくして入学式は終わった。

クラスに戻ると、早速クラスの自己紹介が始まった。俺が一番最後らしく順番待ちをしていた。

前に座っている女子が自己紹介を終え、ようやく俺の番がやってきた。

俺は席を立つと簡単に自己紹介を済ませる事にした。

竜也「如月竜也です。このクラスでは男子が自分一人ですが、よろしく願います。」

俺はそう言つと、席に座った。泣いても笑つても男子はクラスで俺一人だ。なんとかやっていくか。

休み時間に入ると、クラスメイトの女子は仲の良い者同士打ち明けていった。もちろん俺に話し掛ける子がいたが、大半は興味本意で話し掛けたり、何処の学校から来たとかだったりした。

そんななか、少し天然そうな女子がやってきた。

確か名前は平沢唯ヒラサワ ユイだったか。

唯「私、平沢唯。よろしくね如月君」

見た目道理天然そんな感じが印象的だ。

竜也「俺は如月竜也。よろしくな平沢さん」

唯「うん。よろしくね!!じゃあ、竜也君だからタツ君って呼ぶね」

竜也「おう。それなら俺もお前の事をユイって呼んでもいいか?」

唯「うん!!いいよ。」

そう言うとき唯は笑顔で答えた。

そんなこんなで高校初の友達(女子)ができた。しばらく話していると、眼鏡をかけたショートカットの女子がやって来た。

???「唯。ちょっといいかしら?あら、あなたは?」

唯「あつ、和ちゃん」

竜也「唯、この人はお前の知り合いか?」

和「ええ、始めまして。真鍋 和マタヘノドカよ。よろしくね。唯とは幼稚園の頃からの幼なじみなの」

竜也「そうなのか?まあ、よろしくな。俺の事は気軽に竜也って呼

んでくれ」

和「ええ。よろしくね竜也君」

これをきっかけに俺は、唯や和以外のクラスメイトの女子に話し掛けていきすっかりクラスにも馴染むことが出来た。

クラスで浮いた存在にならずにすんで本当によかった。

下校時間になり俺は唯と和と帰る事にした。

ちなみに俺の住んでいる家は学校から歩いて30分から40分の所だ。

唯「それじゃあ、またね」タツ君」

和「また明日」

唯は右腕を大きく振り、和は右手を軽く上げる感じに答えた。

竜也「おう。また明日会おうぜ!!」

俺は右腕を軽く上げ返事をする。唯と別れ、家に帰り着く。

俺は靴を脱いで部屋に向かうと、壁際に置いてあるギターを取る。

竜也「さあて、いっちょやりますか!!」

そう言う俺は夕飯までギターを弾く事にした。

竜也「(アイツ等と一緒に弾けないのが残念だ。けど、俺はシングルになったとしてもギターは辞めねえぜ)」

こうして俺の高校生活は始まった。だが、この二週間後、再びバンドを組むとは思ひもなかった。

入学！（後書き）

作者「いかがでしたか？本編が始まった記念に、本作品の主人公、如月竜也君をお呼びしました」

竜也「ちわーす。どうもよろしく」

作者「とうとう始まりました。」

竜也「そうだな。本編はまだ始まったばかりだしな。中々幸先のいいスタートなんじゃないか？」

作者「そうですね。今回は竜也君が部活に入部します」

竜也「おう！！その名も」

作者「バドミントン部」

竜也「そうそうって、おいっ！！違うだろ！！」

作者「間違えちった（＜|＞）」

竜也「・・・狙い撃つぞコラ（怒）」

作者「すみませんでした？OTZ」

竜也「まったく、次回もまた見てくれよな」

作者・竜也「次回、第2話、入部！お楽しみに！！」

入部！（前書き）

それではどうぞ

L e t ' s R o c k ! ! !

入部！

竜也 Side

入学式が終わってから1週間と4日過ぎた頃だった。
放課後になり、荷物を担いで教室を出ようとしたときだった。

??? 「漣。部活、一緒にぜ」

??? 「待てよ、律。」

??? 「待たないよ、ん」

俺は、漣と呼ばれる黒い髪にロングヘアの女子が、背中に担いである黒いギターケースに目が入った。

どうやら相方の律と呼ばれるカチューシャがトレードマークの女子とバンドを組んでいるみたいだ。

入学式の翌日、この学校の部活の勧誘があつたが、バンドをやっている部活は見たことがない。

俺が見落としたか、元から無いのかは分からないが、知りようがない。

「（職員室に行って聞いてみるか。どうせ家に帰った所で親父はいねえしな）」

俺はそう思うと、職員室に足を運んだ。

これが俺の部活を始める第一歩になった。

竜也 S i d e E n d

律 S i d e

音楽準備室。普段は音楽の授業などで使う器材を置く教室なのだが、放課後には桜高軽音部の部室になる。

律「なあゝ、漣、ムギ」。部活作ったのはいいけど、部員あたしら3人だけじゃバンド組めないな」

私の名前は田井中 律。軽音部部长でもあり、ドラムをやっている。

現在、軽音部の部員はあたしを含め三人。

小学生からの幼なじみで、親友の秋山 漣。担当はベース。

昨日、部員になったばかりのちょっとマイペースな感じが印象の琴吹 紬ことムギ。担当はキーボード。

漣「せめて、ギターが弾ける生徒がいればバンドが組めるのに・・・」

部活は最低4人いないと今月末に廃部になるらしい。

紬「はい。律ちゃん、漑ちゃんも、一緒に紅茶でも飲みましょう」

漑「ありがとう。ムギ」

紬「いえいえ」

ムギがいて紅茶を飲んでいる時だった。

コンッコンッ!!

突然、ドアがノックされたかと思うと、見慣れない顔をした、一見軽そうに見える男子と女子が入ってきた。

??? 「すいませ〜ん。軽音部って此处で合ってますか？」

これが、私達の最初の出会いだ。

律 S i d e E n d

竜也 S i d e

竜也 「失礼しました」

俺はあの後、職員室に行き音楽担当の山中さわ子先生に軽音部の事を聞いた。

何でも、去年までいた三年の先輩が全員卒業して、今月末までに部員が4人いないと廃部らしい。

竜也「（今の軽音部のメンツがどういふのか分からねえが、女子ばっかなのは確定だな）」

（とりあえず演奏を聞いて決めるか）

俺はそう思うと、軽音部が練習する音楽準備室に足を運んだ。

階段を上がると先客がいた。

同じクラスの唯が、準備室の前で立ち往生していた。

竜也「なにやってんだ唯。」

俺はとりあえず声をかけてみた。

唯「あつタツ君！？ちようどよかった」

何がちようどよかったのかは知らないが、事情を聞くと軽音部がどついた部活か知らないで入部届けを出したらしい。

竜也「なら一緒に入るか？俺も軽音部に用があるからよ（しゃあねえ、どうにかしてやるか・・・）」

唯「ありがとぅタツ君ぅ！！」

そう言うとき唯は俺の手を握り上下に振る。

そんなこんなで俺達は部室に入る事にした。

コンッコンッ！！ガチャッ！！

竜也 「すいませ〜ん。軽音部って此処で合ってますか？」

ドアを開けるとそこには、練習ではなく、お茶会をしている女子が三人いた。

ホントに此処軽音部なのか？

??? 「は〜い。そうですが・・・」

一番奥の席に座っているカチューシャを付けた女子が返事をした。

その両端の右に黒髪ロングヘアの女子と、左に何だかお嬢系の女子が座っていた。

一瞬ポカンとした俺だが、気を取り直して質問しようとしたときだった。

??? 「もしかして、入部希望者！？」

竜也 「いやっ、俺は・・・」

??? 「ヤッターー！！！！部員が揃った〜」

??? 「これでバンドが組める！！！！」

??? 「軽音部へようこそ〜」

部員希望者が来たのがかなり嬉しいのかこっちの話を聞いていない。

肝心の唯はというと、すっかり軽音部の空気に吞まれていた。

竜也（こりや大変な部に入ったかもな・・・）

俺は心の中でそう思いながら、用意された椅子に座った。

軽音部のメンバーは俺そっちのけで話を進めていった。どうにかするべく俺から話を振る事にした。

竜也「なあ、せっかくだから演奏してもらっていいか？演奏次第で入部するかどうか俺達で決めるからよ」

そういうと、軽音部のメンバーはそれぞれの持ち場に着いた。

??? 「ワン・ツー・スリー・フォー、ワン・ツー・スリー」

ドラムを叩くカチューシャの子がリズムを取り演奏が始まる。

曲は「翼をください」だ。

演奏を聞きながら俺はメンバーを見回した。

カチューシャの子はやや走り気味で、ベースの子がどうにか合わせ、キーボードの子がなんとかリズムを取っている感じだ。

竜也 「（やっぱ、ギターがないのがネックだな・・・）」

だが、演奏を聞いて思った事は一人一人演奏を楽しんでいる事だ。

そんな彼女達の演奏を聴いて俺は決意した。

竜也 「（コイツ等とならアイツ等と同じくらい楽しめるかもな・・・）」

演奏が終わり俺はメンバーに入部する事を告げる事にした。

竜也 「中々良い演奏だったぜ！！ギターがないのはネックだが、俺でよければ入部していいか？」

そう告げるとメンバーは一瞬ポカンとしたが、声を合わせて喜んだ。

「「「ようこそ、軽音部へ！！！！」」」

唯の奴もさっきの演奏に感動したのか入部すると自分で言い出した。

竜也 「自己紹介が遅れたが、俺は竜也。如月 竜也だ。気楽に竜也って呼んでくれ」

するとメンバーも自己紹介を始めた。

律「あたしは律。田井中 律だ。よろしくな、タツ!」

漣「私は・・・漣。秋山 漣だ。よろしく・・・頼む・・・竜也・・・君」

紬「私は琴吹 紬といいます。ムギって呼んでね、竜也君。」

唯「私、平沢 唯。よろしくね、みんな。」

こうして俺達桜高軽音部は結成された。

入部！（後書き）

今回はどうでしたか？

文才のない自分ですが、精一杯頑張りました。

次回は竜也のギター演奏と唯のギター購入を題材にした話です。頑
張って書いていきます。

竜也 「感想まってるぜ！！」

作者 「それではまた！！」

演奏！（前書き）

今回は割と長いです。では、どづぞー！

演奏！

竜也 S i d e

軽音部に入部した翌日、俺はギターを担いで登校している。

教室に置くと目立つので部室に置くことにした。

階段を上がり準備室のドアを開けようとしたが開かなかった。

竜也「鍵、掛かってんのかよ。あゝどうすっかな・・・」

職員室に行つて鍵を借りてくるのが一番確実なのだが、行ったり来たりなので正直面倒臭い。

此処に居ても仕方ないので職員室に行こうとした時だった。誰かが階段を上がってくる音を聴き、振り向くと・・・・・・・・・・。

澪 「あっ・・・・・・・・!!」

そこには同じ軽音部の秋山澪がいた。

せっかく会つたので挨拶をした

竜也 「よっ！！おはようさん。
秋山も楽器を置きに来たのか？」

漣 「お・・・おはよう・・・」

一応返事をしてくれたのだが、妙によそよそしいというか、テンションが低いな。

昨日楽器を弾いていた時とは違ってまるで別人だな。

それともあれか？楽器を持ったら人が変わるとでもいうのか？

こ。亀の。田じゃあるまいし・・・。

俺は秋山をネタにくだらないう事を考えるのを辞め、部室の鍵について聞く事にした。

竜也 「なあ秋山。部室に鍵が掛かって入れないんだが、鍵持っていないか？」

もし秋山が鍵を持っていなかったら面倒臭いが職員室に行くこと決め、とりあえず聞いてみた。

漣「鍵・・・持ってるよ・・・。私も・・・部室に楽器・・・置きたかったから・・・」

竜也 「そうなのか！？いやあ、鍵掛かってっからどうしようか考えてたんだけどよ、とりあえず鍵開けてくんねえか？」

漣 「……うん……」

ようやく部室に入る事ができ、楽器を部室に置くという当初の目的を達する事が出来た。

竜也 「いやあ、一時はどうするか考えてはいたけど、秋山が鍵持っていたおかげで助かつぜ。ありがとうよ秋や……」

俺は秋山に礼を言うべく、秋山のいる方を向くとそこには秋山はいなく、昨日弾いていたベースが入っていると思われるケースが置いて会った。

竜也 「（なんだ？変わった奴だな……。まあ、放課後になったらいくらかも会えるし、大丈夫か……。）」

俺はあえて秋山を追わずに教室に戻る事にした。

竜也 S i d e E n d

澪 Side

私は、楽器を部室に置いたため朝早く登校した。

何故、朝早く登校するかというと、……あまり目立ちたくないからだ。

部室の鍵は私がさっき職員室から借りてきた。

部室への階段を上がるとそこには先客がいた。

昨日、軽音部に入部してきた男子生徒、如月 竜也君がそこにいた。

よく見ると彼の背中にはギターケースを担いでいた。
彼も楽器を置きに来たのだろうか？

そんな事を考えていると、彼から挨拶してきた。

竜也 「よっ！ーおはようさん。秋山も楽器を置きに来たのか？」

澪 「お……おはよう……」

挨拶されたので、とりあえず返事をした。

竜也 「なあ秋山。部室に鍵が掛かって入れないんだが、鍵持って

ないか？」

どうやら彼は部室に鍵が掛かって入れないらしい。

漣「鍵・・・持ってるよ・・・。私も・・・部室に楽器・・・置きたかったから・・・。」

男子から話し掛けられた事がほとんどない私は、緊張しながら答えた。

竜也「そうなのか！？いやあ、鍵掛かってっからどうしようか考えてただけどよ、とりあえず鍵開けてくんねえか？」

漣「・・・うん・・・。」

私は、鍵を開けて楽器を置くと、急いで教室へ向かった。

まるで彼を避けているみたいだが、本当は恥ずかしさと男子と一緒にいるという現状に堪えられなく思わず逃げてしまった。

漣「（どうしよう・・・。放課後・・・顔を合わせずらい・・・。）」

そんな事を思いつつ、私は鍵を職員室に返しに行き、教室に戻った。

漣 S i d e E n d

竜也 S i d e

昼休みに入り、俺は唯と和と昼食を取りながら今朝の事を話した。

和 「もしかすると、その秋山さんって子なんだけど今まで男子と
触れ合う機会なくてどうすればいいのか解らなかったんじゃないの
？」

和のまるで的を得た意見が帰ってきた。

確かに今朝の秋山の様子を改めてみるとそうなのかもしれない。

竜也 「俺としては普通に話し掛けただけなんだが、少しばかり馴
れ馴れしかったのか？」

和 「どう受け止めるかは貴方次第だけど、唯はどう思う？」

唯 「うん？何が？」

目の前で話してたのにまるっきり聞いちゃいねえ。

そんなに上手いか？メロンパン？

俺は甘いモノが苦手だからよくわからんが……

竜也 「まあ、とりあえず今日放課後会って話してみるわ。」

昼食を済ませ、しばらく経つと昼休みが終わるチャイムになり、午後の授業を受けることにした。

P M 15時30分

放課後になり唯と一緒に部室に行くと、そこにはほかのメンバーがいた。

真ん中に田井中、左に琴吹、そして右……正確には壁端に秋山が顔を右半分ほど出し何やら隠れていた。

律 「ほぐら、澪！！隠れてないで、出てこいって！！」

澪 「……無理……」

紬 「澪ちゃん。お願いだから出てきて。」

澪 「……わかった」

観念したのか秋山は壁端からできた。

そこまで男子又は俺が苦手なのか？秋山よ……

とりあえず俺達2人は席に座り琴吹から出された紅茶を飲みながら雑談を始めた。

俺から見た唯を含む軽音部のメンバーだが、中々個性的だ。

まずは、田井中 律。ポジションはドラムをやり、軽音部の部長をやっている。

メンバーの中で一番親しみやすく、俺達はお互い名前で呼んでいる。次に、琴吹 紬。ポジションはキーボードで、見た目道理ほんのりというか、しっとりしたかんじで、軽音部の癒し系的存在だ。

続いて、平沢 唯。ポジションはまだ未定。一応、ギターを希望しているが、ギター未経験者だ。俺が教えていくという事でなんとかなるがそれ以前に、ギターすらないのでギターを購入次第教えていこうと思う。唯の幼なじみである和に聞いたが、何でもカスタネットがよく似合うらしい。

俺もそう思う気がする。

最後に、秋山 澪。ポジションはベース。律と小学生の幼なじみらしく聞いた話だと昔からこんならしい。

というよりさつきから目を合わせてくれん。

まあ、俺も馴れ馴れしかったのもあるが、そこまでされると逆にキツイ。

話題が尽きたのか、律から話を振られた。

律「そういえばタツ。楽器はなにやるんだ？ギターか？ベースか？」

竜也「俺はギターをやるぜ。そのつもりで入部したんだからな」

律「ならさ、なんか弾いてみてくれよ」

竜也「あいよ。これでも中学からやっているから割と弾けるぜ」

唯「そうなの！？タツ君すごい！！見せて、見せて！！」

竜也「おっし、いっちょやりますか！！」

俺はギターケースから中学からの相棒である深紅のギター、レスポール・スタンダードを出した。

コイツは親父に買って貰った大切ギターで相棒だ。

ちなみにコイツの事を俺は「アンタレス」と呼んでいる。

理由は俺がさそり座生まれなため、それに因んで「アンタレス」と名付けた。

俺はギターにコードを繋げ、アンプに接続させると軽く音を出す。

ジャーン、ジャーン、ジャーン……！！

それから軽くチューニングすると演奏を始めた。

エレキギターが出す音が部室内に響き渡る。

ちなみに、俺が弾いている曲は、「DANGER ZONE」という洋楽だ。

親父が好きな洋楽で、俺がギターをするきっかけとなった曲だ。

最後まで弾くと軽くチョーキングをし、演奏を終わる。

竜也「とりあえず、こんな感じだが……!？」

全員「……………」

なんか開いた口が塞がらない表情をしていた。

竜也「おゝい。返事してくれ〜〜」

しばらくして律から感想を聞いた。

律「凄すぎて言葉に出来ない……」

紬 「凄く上手立ったわ竜也君!!」

唯 「ほえ~~~~~」

漣 「凄い・・・凄すぎるぞ竜也!!!!!!」

それぞれの感想を聞き、俺は気付いた事があった。

竜也 「（秋山の奴、気付いてないのか知らねえが、俺の事、名前で呼んでいたな。まあ、いいか）」

メンバー達の評価も非常に良く俺はかなり嬉しかった。

このあと、唯のギターをどいするか話し合い、軽音部全員で楽器屋に行き、色々見て回った結果、唯のギターを買ったために土日を使いバイトすることになった。

楽器屋を出てお互いの電話番号とアドレスを交換し、今日はこれでお開きにした。

俺は家に帰り着くと、携帯に荷物を部屋に置き風呂にすることにした。

風呂から上がると同時に、携帯にメールが届く。

履歴には、『秋山 漣』と書いてあった。

メールにはこう書いてあった。

『今朝は如月君を避けるような事をしてゴメン。今日の演奏は凄くよかったよ。明日は午前9時駅前に集合だから遅刻しないようにな。』
秋山 澪

俺は読み終わるとすぐに返信した。

『今朝の事は全然気にしていないぜ。あと、俺の事は竜也でいいぜ。これからよろしくな澪。』
竜也

俺は送信すると夕食を手早く済ませ、早めに寝る事にした。

明日は唯のギターの為に頑張るぜ。

演奏！（後書き）

作者「いや、今回は漚とのフラグ成立ですね竜也君」

竜也「書いているのはあんだだろ。ていうか、俺のギターの名前の由来はなんだよ？」

作者「アンタレスの事か？まあ、さそり座もあるけど元ネタはエースコンバットX2の主人公のTACネームからだよ」

竜也「さいですか。じゃあ次に、今回、俺が弾いた『DANGER ZONE』を選んだ理由はなんだ？

作者「作者が好きな洋楽だから」

竜也「なんじゃそりや！？おっと、次回予告しねえとな」

作者「今回は唯のギターを買ったために軽音部と竜也がバイトをします」

竜也「楽しみにしてくれよな」

作者「感想待ってまゝす」

バイト!! (前書き)

今回はバイト編です。多少オリジナルストーリーを入れています。それではどうぞ!!!

バイト!!

竜也 Side

AM 09:00

駅前

今日は軽音部のメンバーで唯のギターを買ったためにバイトをする日だ。

俺は約束の時間の10分前には駅前に着いていた。

それからしばらくすると、漑、律、紬がやって来た。

竜也 「よっ!! みんな揃ったみたいだな。」

律 「おっすっ!! にしても来るの早いなあタツ。」

漑 「そうだな。私と律が最初かと思ったんだが」

竜也 「こう見えても待つのは慣れてるんだよ。そういえば、唯はどうしたんだ?」

紬 「唯ちゃんならあそこにいるわ」

ムギの指差す方を見ると、何やら散歩中の通行人の犬と戯れていた。

竜也 「(何処に行ってもマイペースなやつだな……)」

5分後・・・・・・・・

唯 「あゝさっきの犬、可愛かったなあゝ」

澪 「おいおい、今日はみんなで唯のギターを買ったためにバイトするんだぞ。遅れたらどうするんだよ。」

紬 「まあまあ、澪ちゃん落ち着いて。それよりも早く行きましよう。」

律 「そうだぜ。早く行こうぜ」

唯 「おゝ！！レッツゴー！！」

こうして俺達はバイトをしに行く事にした。

期間は今日と明日の二日間で日給一人辺り8000円と、割といい値段だ。

内容は、交通調査でこの地域を通る車の交通量をカウントしていくという簡単そうで地味に辛い仕事だ。

二人一組に別れることになり、組分けは唯・ムギ、澪・律で別れた。

俺は担当の人と組む事になった。

一時間交代でやることになり、休憩を挟みながら俺達はやることにした。

12時になり俺達は昼食を取ることにした。

どうやら昼食はムギが持ってきたらしく、シートをしき全員で座って食べる事にした。

竜也 「（学校じゃ気にしていなかったが、男一人に女子4人。浮いてんな俺。）」

普段見慣れた制服ではなく、私服姿の彼女達を見るのは新鮮だった。立ち位置的には俺を挟むように右側に唯・ムギ、左側に澪・律という世の男どもから見たら羨ましい限りのポジションだ。

俺達は雑談をしながら昼食を取ると午後のシフトに移った。

ちなみに、昼食のサンドイッチはムギの家で作ったらしくかなり美味かった。

5時になり、今日のノルマを達成した俺達はそれぞれの家路に着いた。

明日も今日と同じ時間に集合するように澪を通じてメールが届いた。

翌日、昨日と同じ時間と場所に集合した俺達はバイトに向かうことにした。

今日の昼食もムギが家で作ってきたものらしく、結構楽しみだ。

竜也「（最近思ってたんだが、ムギってなんか普通の一般家庭の子と違う気がするな……………」

部室に置いてある食器棚や紅茶、ケーキ、食器どれも一級品揃いだ……………」

まさか、何処かの金持ちや会社のお嬢か何かか？」

俺はそんな事を考えながらバイトに移っていた。

だが俺は、このあとその予感が的中するとは思いもしなかった。

夕方になり担当の人にバイト代を貰うと、金額を数えた。

日給8000円、二日で16000円で80000円だ。

金曜日学校帰りに楽器屋へ行った時に、唯が欲しがっていたギター、俺とは色違いではあるが、25万円のレスポール・スタンダードにはまだ届かない。

唯の手持ちの所持金を合わせても半分以下だ。

竜也「（先は長いなこりや……………」

そう思った矢先だった。唯が声を枯らすように言った。

唯 「……やっぱりこのお金、受け取れないよ……………」

これは、皆が使つて。」

唯は申し訳なさそうな顔で俺達を見ると、バイト代を俺達に返そうとしていた。

律 「何、言つてんだよ唯！！ お前、あのギター欲しくないのか！？」

漣 「みんな、唯の為に頑張ったんだぞ。 お金の事なら気にするな」

紬 「そうよ、唯ちゃん。 気にしないで。」

律達がどうにか唯を説得しようとしていたが、肝心の唯はというと、今にも泣きそうな顔をしていた。

俺は唯に近付くと、そつと頭に手を載せ撫でてやった

竜也 「みんなの言う通りだぜ唯。 俺達は全然気にしちゃいねえよ。

それよりも、お前が欲しがっていたギターを買うのが大切なんだよ。

だから、泣くなつて。 お前はいつも通りに笑つてるほうが唯らしくぜ。」

唯 「タツ君……りつちゃん……漣ちゃん……ムギちゃん……みんな……ありがとう！！」

そこには、さっきまで泣きそうな顔ではなく、いつもの唯の笑顔があった。

律 「おっし！！唯も元気になった事だしさ、皆であの店にいこうぜ〜〜！！」

律が指を差す方角を見ると、先週の金曜日に行った楽器屋があった。

竜也 「（なるほどな・・・欲しいギターをあらためて見せて、唯のモチベーションを上げようとして事が。

律のやつ・・・以外としっかりして、皆の事を考えてるんだな。

部長は伊達じゃないみたいだな。」

唯の方かというと、レスポールをまるで、恋人を見るような目で見ていた。

そこで俺はムギがない事に気付いた。

竜也 「（そーいや、ムギのやつ何処行っただ？
店に入るまでは一緒だったはず・・・。）」

??? 「もうひと声〜〜〜！！」

俺の思考を遮るかのように、何処からか聞き覚えのある声が聞こえた。

まさかと思い、俺は声が聞こえた方へ向かうと、そこには何時もの笑顔を見せるムギと、泣きそうと言うより意気消沈した店員さんがいた。

紬 「あつー！竜也君、唯ちゃんが欲しがっていたギター5万円です売ってくれるらしいの／＼／＼」

俺はあまりの出来事に声が出なかった。むしろ、出せなかった。

25万円するレスポールが、5万円って割引を通り越して超格安販売だろ！？

琴吹 紬・・・本当にお前は何者なんだ？

結局、あの店員さんは唯にレスポールを5万円という、破格の安さで売ってくれた。いや、売らざるおえないの間違いか！？

見間違いならいいが、横からムギが店員さんを笑顔で見つめているのは気のせいか・・・？

律 「なあ、ムギ、あの店員さんに何を言ったんだ？」

漚 「そつだ、どう考えてもあの値段はおかし過ぎるぞ!？」

律と漚の疑問に対しムギは何時もの笑顔でとんでもない爆弾発言をした。

紬 「あのお店、父が経営する会社の系列なの／＼」

なんてこつた・・・。

なんとムギは、正真正銘の社長令嬢だった。

社長令嬢ときたら高飛車なイメージがあつたが、ムギはそんなイメージを吹き飛ばす性格だった事に驚いた!!

そつなると、ムギが自前で持って来た部屋に置いてある食器棚な紅茶、食器に説明がつく。

だが、俺達はそんな事などお構いなしにこれから、やっていこうと思う。

なぜならば、ムギのおかげで唯のギターを買うことができ、ようやくバンドとしてのスタートをきれるからだ。

それから俺達は明日学校で会う事を約束し、帰宅していった。

俺は家に帰り、風呂に入る事にした。

竜也「（今日は色々あり過ぎて疲れたぜ……。飯食ったら軽くギター弾いて寝るか……）」

風呂から上がり、夕食を済ませ、部屋に行こうとした時だった。

ポケットに入れている携帯が鳴り出した。

画面を開くとそこには、昔からよく知っているアイツ『吉田哲也』の名前が書いてあった。

俺は直ぐに電話に出た。

竜也「よお、久しぶりじゃねえか哲也。元気にしてたか？」

哲也は俺の昔からの親友だ。俺は久しぶりの電話に眠気が吹っ飛んだ。

哲也「まあね。そっちこそ久しぶり。

そっちはどうだい？うまくやっているかい？」

竜也「まあな。思ってたより、やりやすいぜ。そっちはどうだ？恭平やグッさん、あと……。優佳はどうだ？元気にやっているか？」

哲也「まあね、恭平や孝一郎、それと……。優佳も……。皆、元気にしているよ」

恭平、孝一郎あいつ等の元気な姿が目に見えぬ。

そして、優佳……。

昔の事って、振り切ろうにもなかなか振り切れないもんだな。

竜也 「そうか……。なら良かったぜ。久しぶりにお前の声聞いて安心したぜ」

哲也 「僕もそうさ。そうだ!! 今月末、空いてるかな? もしよかつたら遊ばないかい?」

竜也 「おうっいいいぜ!! 俺もアンタレス連れて来るからよ!!」

哲也 「楽しみにしているよ。それじゃまたね」

竜也 「またな、親友」

親友からの電話を切ると、俺はベッドに横になる。

竜也 「優佳……。俺はお前にどう向き会えばいいんだ? ……」

俺はそのまま意識を闇に落としていった。

バイト!!（後書き）

作者 「どうも、ドラゴンインストールです」

竜也 「ちーす。如月 竜也だ。」

作者 「今回は、バイト編、ギター購入、そして……」

竜也 「昔の仲間との電話だな」

作者 「彼らの設定は後ほど投稿します。」

竜也 「次回も楽しみにしてくれよ」

作者 「それではまた会いましょう。竜也君、締め言葉を」

竜也 「俺の演奏で、君のハートを狙い撃つぜ!!」

追試（前書き）

今回は唯の追試イベントです。では、どうぞ！

追試

竜也 S i d e

唯のギターを購入して、一週間が経った。

驚いた事に唯はギターのコードは疎か、楽譜の読み方すら分からなくて、俺達は教えるのに苦労した。

だが、なぜかチャルメラだけはしっかりと弾けた。

なぜ、チャルメラだけ弾けるのは今だに謎だ。

何時もように唯はギターを練習しているときだった。

唯 「痛っだ！！！！」

突然、唯がギターを弾くのを辞め、指を離した。

恐らく、慣れないギターのコードで指が吊ったのだろうか、痛そうに指をおさえてる。

俺もギターを始めた頃、よく指を吊らしていた。

唯 「ギターの弦って触れる切れそうで怖いよね」

律 「そうだが、気をつけないと指をスパッっと切れて、血が

ドバツーつと「きゃあああああ！！！」

律が言い終わる前に、突然女の子の悲鳴が聞こえた。

聞こえた方を見ると、漣が耳を両手で塞いで座り込んでいた。

漣 「いつ痛い話はダメなんだ？」

そういえば律が前言ってたな。漣はこういった痛い話や怖い話がNGだと。

このままだと練習に支障がでるから話題を変えるか。

竜也 「今のはあくまで大袈裟な例えだ。実際そうなるわけじゃねえって」

唯 「大丈夫だよ漣ちゃん。血なんて出てないから、ほらっ」

唯が漣に指を見せてどうにか落ち着かせようとしていた。

それを見て安心したのか、漣は気を取り直しどうにか立ち直った。

漣 「おほんっ！！まあ、練習していくうちに指先が硬くなるから、指が切れるなんて事はないさ。ほらっ」

漣は唯に自分の指先を見せると、その指先を眺める。

唯 「ホントだ〜プニプニしてる〜プニプニ〜プニプニ〜あははは
〜プニプニ〜」

漣 「え．．．えっと．．．もういい？」

唯 「もっとうちよっただけ!!」

竜也 「お〜い、唯。その辺にしとけて。練習するぞ」

唯 「はっ!?!?そうだった!」

予想以上に漣の指先が良かったのか、すっかり練習を忘れていた唯をどうにか引き止める事にした。

漣は自分の指先が思った以上に気に入られすっかり顔を紅くしていた。

結局、唯の集中力が切れてしまい今日はお開きになった。

その日の帰り道に俺と唯は一緒に帰る途中、珍しく唯の幼なじみである和にあった。

唯 「あっ!!和ちゃん!!」

和 「唯、それと如月君、唯．．．それ新しい挨拶??」

唯は和に挨拶するべく手を挙げたのだが、その手はギターのコードを表していた。

そういえばこの3人が揃って帰るのは初めてだな。

俺と唯は軽音部で、和は生徒会に入ったんだな。

和 「そういえば唯、明後日から中間テストだけどちゃんと勉強してるの？」

唯 「中間テスト？」

和の質問に初めて聞くかのような唯。

忘れてやがったなコイツ。

ちなみに俺は割と家で勉強しているからそれなりに大丈夫だ。

私立になってから急に難しくなったからな、それなりにやりますか。

2日後、中間テストが行われた。

現代文、数学、社会はまあ大丈夫だった。

英語は、中学時代にバンドを組んでいたところ、歌を通して英語を理解していたから、それなりには自信がある。

理科は・・・かなり不安だが、勘でどうにか空欄を埋めた。

ふと、唯の方を見るとまるで、とあるボクサーの如く真っ白に燃え尽きていた。

激しく不安だ。

竜也 S i d e E n d

唯 S i d e E n d

どうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしよう。どうしよう。

テスト全然解らなかった。

最近、ギターのコードに夢中になって全然勉強してなかった。

赤点だったら皆に悪いよ……………。

唯 S i d e E n d

竜也 S i d e

テストから2日後、答案が帰ってきた。

現代文、数学、社会は平均点よりちょい上の80点か。

だいたいこんなもんだろ。

英語は、90点。

こいつは上出来だ。

理科・・・45点。

まさか、赤点と平均点の真ん中とはな。

俺自身驚いた。

放課後になり、部室に行くと、唯は・・・・・・・・完全に灰にな
ってやがる。

唯「・・・・・・・・クラスでただ一人・・・・・・・・赤点です」

和の悪い予感が当たりやがったなこりや。

紬「唯ちゃん、元気出して。」

漣「今回は勉強のやり方が良くなかったただけだろ。来週ある追試
で頑張れ唯」

律「そうだぜ！！答えはわかってるんだし、追試何て楽勝だろ！
！」

竜也「そう言うこつた。種がわかったトリックなんて簡単だぜ」

俺達は唯を励ますべくフォローするなか、当の本人は信じられな
事を言った。

唯 「・・・全然勉強してませんでした・・・」

律・竜也 「励ましの言葉返せコノヤロー!!」

俺と律は唯の爆弾発言に絶妙なタイミングで怒った。

唯 「でも、勉強してない分、コードは沢山弾けるようになったよ
!!」

こいつ・・・開き直りやがったな。

澪 「その集中力を勉強に活かせば・・・」

紬 「まあ、まあ、まあ、まあ、まあ、まあ」

唯 「・・・6回」

澪が正論を言うなか、ムギは律を宥めていた。

それから唯、数えるな。

この学校の規則では、赤点を取った者は部活動禁止となっている。

このままだと演奏もせずに唯が退部してしまう。

それを回避すべく俺達は、唯の家で勉強会を開く事にした。

平沢宅

俺達は勉強会をするべく唯の家に來ていた。

唯の両親も今日は仕事で留守にしているらしい。

玄関を開けるとそこにはどことなく唯に似た女の子がいた。

「??? お帰りーお姉ちゃん。 あっ!! はじめまして、妹の平沢憂です。 いつも姉がお世話になっています。 どうぞ、上がって下さい」

どうやらこの子は唯の妹らしい。

姉である唯と違い礼儀正しい子だ。

俺達は満場一致でこう思った。

全員 「~~~~~」 (出來た子だ~~~~~) 「~~~~」

唯の部屋に入り、漣とムギは唯を挟むように座った。
律は机の椅子に座り、残った俺は壁にもたれ掛かるように座った。

律 「漣って教えるのに上手いんだぜ、一夜漬けの」

漣 「うおおい！！普通に教えるよ！！」

そんなこんなで唯の勉強会が始まった。

開始10分くらい唯の集中力が尽きてしまった。

唯 「もう無理。ケーキないから力が出ない」

お前はア○パ○マ○か！？

漣 「まだ10分しか経ってないぞ」

紬 「唯ちゃん。頑張ったらケーキあげるから頑張って、ね。」

唯 「よっしゃあああ！！！！」

今度は某勇者王のような掛け声を出すと、猛スピードで課題に取り組んでいった。

ムギ、ナイスアシストだ。

そんな時、妹と憂ちゃんが部屋に入ってきた。

憂 「皆さん、お茶をいれましたんでどうぞ」

きっちり人数分のお茶を配っていく。

そこで俺達はまたもやこう思った。

全員 「……」（ホントに出来た子だ……）「……」

勉強も一段落ついて休憩を入れる事にした。

律 「なあ〜唯〜憂ちゃんくれ」

漣 「おいっ！！律には聡がいるだろ！！」

律の支離滅裂な発言に、漣がツツコミをいれる。

竜也 「確かにありや出来た妹越えて、出来た奥さんだな」

律 「へ〜え。タツってああいう子が好みなのか〜だってよ、漣」

漣 「なっなんで私に振るんだよ?!?」

紬 「なるほど……男の子はああいうのが好みなのね……」

律が俺をからかうかと思いきや、漣に振ると妙に漣が慌て出した。

ムギ、真に受けるな。

唯 「あれっ？ 漣ちゃん、ムギちゃんどうしたの？」

此処に分かってない奴が一名いた。

それから1時間経ち、ちょうど午後8時頃になって俺達は勉強会を切り上げた。

平沢姉妹が玄関まで見送ると、俺達は家に帰る事にした。

ムギは迎えの車で帰るらしく、途中で別れた。

残ったのは俺、漣、律だ。

俺を挟むように右に漣、左に律と、端からみたら両手に花だな。

漣を家まで送ると、俺と律で帰る事にした。

帰る途中、律が俺に何気ない質問をしてきた。

律 「なあ・・・タツ・・・この後・・・暇か？」

竜也 「ん？ ああ、暇っちゃ暇だな。帰っても風呂入って、飯食って、寝るだけだしな」

俺はそう答えると、律は何時もと違い何やら恥ずかしげに聞いてきた。

律 「今夜、家誰もいないんだ……。よかつたら家で、晩御飯食べてかないか……？」

竜也 「おいおい、いいのか？親御さんに迷惑なんじゃ……」

律 「今夜……。弟の聡も部活で遅いし、両親も出張でいないんだ……。無理には言わないけど……」

俺は、目の前にいる律が何時も違うのに若干戸惑っていた。

もしかして、こっちが素なのか？

だが、律の料理に興味を湧いた俺は返事をした。

竜也 「ならお言葉に甘えてお邪魔するぜ。美味しい料理を頼むぜ、律。」

律 「おう！！任せとけ」

田井中宅

俺は律の家に入ると、リビングに荷物を置き、テーブルの椅子に座った。

律は台所に入ると料理に取り掛かった。

竜也 「（・・・まるで、奥さんの料理を待つ旦那さんだな俺。ん？となると、律が奥さんか？おいおいおいおい、待て待て待て、何意識してんだ俺！！相手は律だぞ！？平常心だ竜也！！）」

一瞬、妙なビジョンが頭を過ぎったが、平常心をフル動員し、どうにか落ち着いた。

しばらくすると、料理が出来たのか、香ばしい匂いが漂った。

律 「へい、お待ち！！律ちゃん特製ハンバーグスペシャルだっぜ
！！」

竜也 「おっ美味そうだな！！ んじゃ、頂くぜ！」

律 「へへっどうぞ召し上げれ！！」

俺は律の作ったハンバーグを食べることにした。

味はかなり美味かった。

竜也 「いやあかなり美味かったぜ、ありがとよ律」

律 「おっおう。お粗末でした／＼／＼」

律が若干顔を赤くしつつ礼を言ってきた。

時計が9時を過ぎた頃、俺は帰る事にした。

玄関先まで律が送ってくれた。

竜也 「いやあ、今日はホントにありがとよ律、お前将来いい奥さんになるぜ。お世辞抜きで」

律 「そう・・・か／＼／＼」

竜也 「おう！！それじゃまた明日学校でな」

律 「ああ。またな、タツ」

俺は家に帰ることにした

律のやつ妙に顔が赤かったが、まさかな・・・。

そんな事を考えつつ家に帰り着くと、部屋に行き寝ることにした。

竜也 Side End

律 Side

勉強会が終わってタツを誘ったのにはわけがある。

休憩の時タツが言ってた「出来る奥さん」が気になったからだ。

今夜、両親と聡が居ないのを思いだすと、私はタツを晩御飯に誘う事を決めた。

自分の家に男子を誘う日が来るとは思わなかったが、案の定、タツが誘いに乗ってくれた。

晩御飯を作るなか、ふと、思った。

まるで、旦那さんに料理を振る舞う奥さんみたいだと。

律 「(となると、奥さんがあたしで、旦那さんが・・・タツ・・・タツ・・・タツなのか!?)」

タツをネタに妄想が膨らみつつ、布団に潜り込む。

律 「(タツはあたしの事・・・どう思ってるのかな・・・?)」

あたしはそのまま眠りにつく事にした。

律 S i d e E n d

竜也 S i d e

今日は唯の追試を受ける日だ。

皆、妙にソワソワしているな。

確かに心配だが、俺は唯を信じて待つ事にした。

1時間後、唯が答案を片手に部室に入ってきた。

漣 「唯……」

紬 「どうだったの唯ちゃん？」

律 「まさか……ダメだったのか!？」

メンバーが唯を心配するなか、当の本人はゆっくりと顔を上げて答案を見せた。

唯 「どうしよう……100点取っちゃった!？」

漣 「極端な子っ!!!」

まさか、100点取るなんてさすがに想像できなかったぞ。

結果、唯の退部は回避できた。

だが、一難去って、また一難、今度はギターのコードを忘れてしまったらしい。

唯曰く、一つの事に集中すると、他全部忘れるらしい。

俺達は揃って深い溜息をついた。

こんなので大丈夫なのか軽音部？

俺は激しく不安だ・・・

そういえば、月末に哲也と遊ぶ約束してたな。

来週の土日が楽しみだぜ

追試（後書き）

作者 「ちょっぴり〜ッす！ドラゴンインストールで〜す！！」

竜也 「おっす。やけにテンション高えな」

作者 「フルメタTSRのOP『南風』聞いて、スランプ脱出したぜー！！」

竜也 「そいつは良かったな。」

作者 「今回は、原作にない展開を書きました。」

竜也 「まさか、律から夕飯を誘われるとはな」

作者 「なんだかんだ言っで、凄く嬉しい癖に」

竜也 「確かに、家庭的な子は俺の好みだな」

作者 「だってよ、皆」

漣、律、紬 「「「「／／／／／／／／／／」」」

竜也 「って居たのかよ！？」

作者 「呼んじやいました（＾Ｏ＾）」

竜也 「全く・・・」

作者 「さて、次回は竜也君の親友との再会です」

竜也 「楽しみにしていてくれよ」

作者 「ご期待下さい。ではまた」

再会！！（前書き）

今回は、竜也君の親友である哲也君の登場です。
それでは、どうぞ！！

再会！！

竜也 Side

月末の日曜日。

今日という日が来るのを俺はずっと待っていた。

概ね3ヶ月振りだろうな。

俺の親友であり、良き理解者とも言える『吉田哲也』
約束の時間はAM10:00

俺は5分前には集合場所である駅前に着いていた。

竜也 「さて、あいつは・・・っと、いたいた。
おい、哲也！！」

周囲を見渡して哲也を見つけだすと、俺は右手を大きく振った。

哲也 「やあ、竜也。 久しぶりだね。 元気してた？」

竜也 「まあな。 お互い元気そうで何よりだぜ！」

哲也 「そうだね。 今日は何処に行くんだい？」

竜也 「そうだな・・・取りあえず、ゲーセンでも行こうぜ！」
行き先を決めた俺達は、足を進めた。

哲也とはガキの頃からの長い付き合いだ。

最初は全然喋らない奴だったが、俺が積極的に話していき、今では普通に喋るようになった。

中学時代、まだ、バンドを組んでない時、俺がギターで、哲也がベースを弾いていた。

それからしばらく経って、ドラム担当の孝一郎ことぐっさん、リードギター担当の恭平、そして、キーボード担当の優佳。

俺達5人で中学時代バンドを組んでいた。

バンド名は『Red Scorpion』だ。

オリジナルの曲はなく、既存の曲をアレンジしたのを弾いていた。

曲選びはメンバー全員で話し合って、流行りものの曲から懐かしの曲まで色々弾いたものだ。

毎日が楽しい日々だった。

楽しい日常をぶち壊した、あの野郎が来るまでは。

哲也 「・・・也、竜也ってばっ!！」

竜也 「っ！！どうした？哲也？」

哲也 「さっきからどうしたんだい？ 少し怖い顔してたけど？」

竜也 「悪い。ちょっと考え事してた。」

俺は哲也に謝ると、軽く深呼吸し気持ちを入れ替えた。

どうやら顔に出ていたらしいな。

哲也 「あの事、まだ気にしているのかい？」

竜也 「・・・まあな。」

哲也 「忘れるとは言わないけど、今は楽しもうよ。折角久しぶりに会えたんだしさ」

竜也 「それもそうだな。

気を遣わして悪い」

俺達は目的地のゲーセンに着くと、久しぶりに遊ぶ事にした。

手始めに音楽関連のゲームからやっていった。

ギターのゲームでは、満点に近い得点を俺と哲也で出し、周りの人から拍手をもらった。

ちなみに弾いた曲は、『創世のアクエリオン』、『チェリー』、『

DAYS』だ。

昔、俺達が弾いた事もある思い出の曲だ。

夕方になり、駅前に戻り哲也と別れる事にした。

哲也 「今日はありがとう竜也。 凄く楽しかったよ」

竜也 「俺の方こそ礼を言っぜ。 次に会える日を待ってるぜ」

哲也 「そういえば、今入っている部活、軽音部だっけ？ 文化祭にライブするなら見に行くよ」

竜也 「おう！！待ってるぜ親友」

そう言つと俺と哲也は別れた。

今日は凄くいい一日だった。

俺は帰りに楽器屋に寄り、ギターの消耗品を買い家に帰った。

夜、久しぶりに親父からメールが届いた。

内容は『彼女出来たか？ もし出来たら教えてくれ』

全くあの中年親父ときたら、心配しているのか、期待しているのか、相変わらずわかんねえぜ。

俺は、『そのうちな』と返信すると、明日に備え寝ることにした。

そっぴや俺達、まだ一度も音合わせしてない事に今更気付いた。

竜也 「（明日、漣辺りに尋ねるか）」

そっぴ、俺は瞼を閉じた

再会！！（後書き）

作者 「今回は、いかがでしたか？合宿編前にオリジナルストーリー
Iを入れました。」

竜也 「まあ、俺は哲也と会えて良かったぜ」

作者 「さて、次は待ちに待った合宿編です！！」

竜也 「期待して待っていてくれ」

作者 「ではまた会いましょう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4267q/>

けいおん！ Red Scorpion & Girls Band

2011年10月7日22時24分発行